

あおつた／蔦はブドウ科の
つる性落葉木本。山野の
岩や樹木に着生する。夏の
滴るような蔦の緑は涼しげで
ある。

らしっく

自分らしく、
粋なくらし

CLOSE UP

地域に密着、私たちの国際交流

GetHiroshima

外国人観光客にウェブサイトと情報誌でさまざまな広島を発信

IVC国際ボランティアクラブ

日本語学習の支援をきっかけに、地域交流

広島地域留学生会

地域交流を通して、広島で豊かな留学生活を送る

連載

▶らしっくレポート ひろ記者が行く・お互いの心を開いて語り合える場を

▶らしっくコラム・広島における国際交流 ▶ようこそ！公民館へ～東区内公民館～ ▶人材バンク 名人 宝人 達人

▶Hmri助成支援団体のご紹介 ▶情報の森 ▶プラザ通信



外国人観光客にウェブサイトと情報誌で さまざまな広島の今を発信

「GetHiroshima」の皆さん



地域に密着、私たちの国際交流

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を控え、広島を訪れる外国人は今後も増加すると考えられます。今回はさまざまな活動で国際交流を行っている団体を紹介しつゝ。

GetHiroshima

<http://gethiroshima.com/>

コンパクトなまちならではの魅力を伝える

広島を訪れる海外からの観光客向けに、ウェブサイトでの情報発信と年4回フリーマガジンの発行を行っているのが、ポール・ウォルシュさんが編集長を務める「GetHiroshima」です。

「イギリス生まれの私は、大学卒業後の平成3年春に来日。九州で3年間生活した後、アジア諸国を旅し、平成8年に広島に移り住みました。広島での生活も数年経った頃、広島には海外から来た人たちが集う場所が少ないことに気付きました。広島は、関東や関西の都市と比べても面白く、ちゃんと調べるともっと楽しめる場所があります。そこでそのような情報にニーズがあるのではと思い、平成12年にウェブサイト「GetHiroshima.com」を作りました」とポールさん。

その後ポールさんは、大学講師の仕事に携わりながら、他の都市や物と比較するのではなく、広島で生活する人たちの実情や生の声を、インターネットを活用し情報発信、コミュニティづくりの活動に取り組みます。さらに平成16年には、広島の観光と経済を後

押しすることを目的に、広島を訪れる外国人観光客専用の地図「GetHiroshima Map」を発行します。

「広島のみちは、コンパクトなサイズの中に、面白い場所がギュッと詰まっているのが魅力ですね。若い世代にとっては刺激が足らず、つまらなく感じて他の都市での生活に憧れる人もいるかもしれません。しかし30代以上の家族を持つ人たちにとっては、十分楽しめる要素があると思います」。広島に住んで20年近いポールさんは、広島の印象についてこう語ります。また広島を訪れる海外からの観光客については「広島を訪れる大半の人が、広島から平和を学びに来ているのではないのでしょうか。原爆が落とされたまちが今、どうなっているのか



▲編集長のポール・ウォルシュさん



地図「GetHiroshima Map」▲▲

を見たいと。歴史的観点から見て、広島を訪れることに初めは抵抗感を感じていた人も、実際に来て原爆ドームや広島平和記念資料館を見ると考えが変わる人が多いようです。今の広島を見て感動し、また訪れたい、と思っている人は数多くいると感じているそうです。

一方通行ではなく偏らずに発信することが大切

平成26年、ポールさんは地図「GetHiroshima Map」に代わる情報発信として、仲間と年4回発行するフリーマガジン「GetHiroshima MAG」を作成。ポールさんを中心にスタッフが集めた地元民も知らないディープでローカルな情報をまとめて掲載。訪れた人が困らないようにグルメや宿泊施設の情報はもちろん、イベント情報や、まちでの遊び方の提案など、外国人目線から見た広島の魅力や独特な観光情報を届けています。またウェブサイト「GetHiroshima.com」で取り上げた記事を幾つかピックアップし、広島の放送局と連携したウェブサイト「ひびひろしま」で日本語でも発信しています。

「国際交流は、どちらか一方通行ではなく、お互いに共通認識を持って交流を深めていくことが大切だと考えています。そのためには、偏った情報を発信するのではなく、常にフェアな情報を発信することが信頼につながっていくと思います。そのためのツールに「GetHiroshima」がなってくれば」。

広島を訪れる海外からの観光客が増える今、ウェブサイトと情報誌を通じて、実際に暮らす人たちのリアルな声を発信し、訪れた際に役立ててもらい取り組みをしているポールさんとスタッフの皆さん。広島を思う熱い気持ちと国際交流をサポートする取り組みに、大きな夢と可能性を感じました。



▲フリーマガジン「GetHiroshima MAG」

c o n t e n t s

- 01 特集**
地域に密着、私たちの国際交流
 - ▶ GetHiroshima
 - ▶ IVC国際ボランティアクラブ
 - ▶ 広島地域留学生会
- 05 らしくレポート ひろ記者が行く**
 - ▶ お互いの心を開いて語り合える場を
- らしくコラム**
 - ▶ 広島における国際交流
広島経済大学 経済学部教養教育部
ジョージ・R・ハラダ 教授
- 06 ようこそ！公民館へ・東区内公民館**
- 07 人材バンク 名人 宝人 達人**
 - ▶ 川原 隆志さん
 - ▶ 佐々木著とヒロシマ・ハーモニカン・ファミリー
- 10 Hm助成支援団体のご紹介**
 - ▶ 黄金山さくらの会
 - ▶ ひろしまSUPクラブ
- 11 情報の森**
- 15 プラザ通信**



【表紙写真】「GetHiroshima」の皆さん

日本語学習の支援をきっかけに、地域交流

IVC国際ボランティアクラブ

地域との交流を目的に日本語教室を開設

平成23年から、在日外国人の日本語学習の支援と、地域との交流を目的に、広島市西区にある草津公民館を拠点に活動しているのが「IVC国際ボランティアクラブ」です。



▲メンバーと在日外国人の皆さん

「日本語学習の支援を通して、在日外国人と地域住民との出会いと、学びあいの場を創造することを目的に、草津公民館で開かれた日本語教室が出発点です」と現在代表を務める小林真知さんは語ります。

当初は、毎週土曜日のみでしたが、現在は毎週水曜日と土曜日に教室が開かれ、10人ほどのメンバーがアジアやアメリカなど8ヵ国20人近くの在日外国人に日本語を教えています。「教室に通ってくる皆さんは、技能実習生や仕事の関係で住み始めたなど理由はさまざま。住んでいる地域もいろいろで草津公民館の近隣の己斐、井口、古田、五日市などから通って来ています」。

毎回メンバーが、テキストを使ってほぼマンツーマンで指導。読み書きを中心に、習う側のレベルに応じて、毎回1時間半から2時間ほど教えています。「教室は、



▲日本語教室の様子

始まりはあるけど“ここまで達したら終了”という制限はないので、ずっと続けて通う人もいます」。

教える側、教わる側の信頼関係が深める絆

日本語を教える側、教わる側、それぞれが教室に通ってくる中で生まれているのが、日本語を学ぶこと以外の、人と人との絆です。教える側のメンバーは、いろいろな国の人と知り合い学べる異文化交流の楽しさを感じるのももちろんですが、何より教室に通ってくる在日外国人の皆さんの熱心さに引かれています。在日外国人の方々と、メンバーとの交流、そして一緒に学んでいる在日外国人同士の交流も楽しみにして、教室に来るそうです。

また日本語教室以外に、毎年秋に開かれる草津公民館まつりにも参加。地域住民の方々に活動を知ってもらい、交流を深めるために、出身国の文化や料理の紹介、在日外国人の方自身が感じた日本について、日本語でスピーチする場を設けています。

「活動を始めた頃は、メンバーの数も少なく、在日外国人の方々に日本語を教えることで精一杯でした。しかしメンバーが増えるにつれて、少しずつコミュニケーションも図れるようになり、できるだけ日本文化も伝えようと努めています。教えるなかでメンバー自身も日本語や日本文化について新たに気づくことが多々あります。日本語を教えることで私たち自身も学ぶことがたくさんあります」と小林さんは語ってくれました。

日本語を教えることをきっかけにした国際交流の取り組み。コツコツと続け、やりがいを積みあげていくなかで広がる活動に感心しました。



▲草津公民館まつりの様子

地域交流を通して、広島で豊かな留学生生活を送る

広島地域留学生会

サポートを受け、地域住民と交流

平成11年に広島県内の大学や日本語学校などへ留学している学生が、広島で豊かな留学生生活を送ることを目的として作られたのが、学生主体の組織「広島地域留学生会」です。「広島県留生活躍支援センター」のサポートを受け活動し、現在、広島県内76ヵ国約3,900人の留学生ほぼ全員が参加しています。留学生の代表を務めるのは、来日3年目で広島修道大学に在籍している王喜艶さん、「広島県留生活躍支援センター」の高松奈央さんが取りまとめをしています。「サポートは大きく分けて二つ。一つ目は、主要大学それぞれにある留学生会の代表者を中心に構成される執行部会を通じて、留学生が学ぶこと以外に、生活する上で必要な情報を収集し発信しています。二つ目は、留学生が地域の人々と触れ合う交流事業の企画運営です」と高松さん。

交流事業の一つとして、今年の6月に安芸高田市を舞台にフィールドワークを開催。留学生と公募で集まった日本人学生、そして地域住民がグループに分かれてまちを散策。地域の魅力を一緒に探ることで親睦を深めたそうです。

留学生と地域住民を結ぶ、架け橋としての役割を担う

「多くの留学生は、私たちが想像している以上に日本語が上手なので、日常会話に困ることはありません。ただ学校やアルバイト先以外に日本人との交流が少ないという学生も。もっと日常で地域の方々と触れ合う機会が増えたら、国際交流は盛んになっていくのではないかと思います」と高松さん。そのための一環として、地域との交流事業をどう展開し増やしていくのかを日々考えているそうです。



▲執行部会の様子

代表の王さんは「学校で学生同士の交流はありますが、学校以外で日本人との交流はまだまだ少なく、その機会が増えるのはありがたいことです。日本人との交流を深めることで、自分自身



▲王喜艶さん(左)と高松奈央さん(右)

を含めて、新たな価値感や文化の違いを発見できるから」と語ります。王さん自身、中国から日本に留学する際に、他の都市と比較し生活する上での住みやすさを考慮し留学先として広島を選択。それまで広島についての知識は少なかったものの、実際に住み歴史を知り、平和についてもさまざまな観点から考えることができたそうです。今年は留学生の代表として8月6日の平和記念式典に参加します。

また今後の活動について「交流事業も一過性に終わらせるのではなく、継続的に交流が続くような内容を模索しています。それも観光要素だけではなく、もっと留学生と日本人が生活に密着する中で、触れ合う機会を作ることにも考えています」と高松さんは語ってくれました。若い世代による、広島だからこそできる国際交流の在り方を探る取り組みが、今後どうなるのか、大きな可能性に期待が寄せられます。



▲安芸高田市フィールドワークの様子(平成29年6月)